

Newsletter

May 2010

<http://www.aack.or.jp>

目次

積雪期北山縦走に憑かれて	阪本公一……………1
シーハイル	安田隆彦……………6
『AACK学生会員制度の創設』の提案	松林公藏……………8
現役学生諸君よりの寄稿	AACK学生会員として入会するにあたって
田中 貴……………9	
海外の山へ向けて	藤竿和彦……………9
ネパール遠征を思う	荻原宏章……………10
梅里雪山の留学生が同志社大に合格	小林尚礼……………11
図書紹介	「トウガラシ讃歌」山本紀夫編著
前田 司……………12	
平成二二(二〇一〇)年度事業計画	……………12
平井一正氏に「瑞宝中授賞」	……………14
事務局報告	……………14
会員動向	……………16
編集後記	……………16

積雪期北山縦走に憑かれて

阪本公一

今西錦司さんの影響を受けたのか、還暦を過ぎてから、積雪期のヤブ山縦走に魅せられてしまった。一〇〇〇mにもみたくない低山ながら、支尾根が複雑に発達し且つ見通しがききにくい樹林の山は、ルートファインディングが大変難しい。そんなヤブ山が雪に埋まった時、山毛櫟や落葉樹の中の、静かな誰のトレースもない雪の尾根を歩くとき、私の心はなぜか躍る。私は若い時から、東北マダギが雪山を自由に飛びまわるような、そんな山登りをしたいと憧れてきた。先鋭的な高度なクライミングをする人たちからすれば、なんと泥臭い刺激のない山歩きかと笑われるかも知れない。しかし、地図を見ながらどのようなルートが面白いだろうかと、登山者が見向きもしない忘れられたような積雪期の樹林の山の縦走計画を企画し、親しい山仲間とテントを担いで何日も歩きまわる山行は私には実に楽しい。厳しい厳冬の剣岳や穂高連峰の縦走をこなせるだけの体力も登攀技術もない高年齢者の私には、自分の実力に見合った山域の京都北山及びそ

の周辺の滋賀県や福井県の低山ヤブ山に、自分自身で企画する独創性のあるユニークな積雪期登山を再発見出来たことは実に幸せだ。

積雪期の低山ヤブ山縦走をやるうと考えたしたのは、故土倉九三氏の追悼集に「彼と私との足跡は、京一中の仲間ではよく知られていない。奥牧野から野坂岳辺にかけての、豪雪の山群にも及んでいる。」と書かれていた川喜田二郎さんの追悼文に遭遇したのがきっかけではなかったかと思う。

野坂岳からマキノの若越国境尾根や京都北山の積雪期の縦走についての記録は、これまで私は目にしたことがなかった。近隣の山岳会に問い合わせてみたが、日帰りのラッセル山行は時々やっているが、積雪期縦走の記録はまったくないとの回答ばかり。ヤブ山縦走といえども、積雪期の縦走となると四〜五日の日程は必要だ。折角の休暇を使うのだったら、北アルプスや南アルプスの迫力ある山歩きに大事な休暇を使いたいと誰しも考えるのであろう。これまでも考えようとしなかった積雪期の北山や若越国境の縦走は、毎日日曜日の暇のある私のような年寄りには挑戦する価値があるユニークな山行ではなからうかと思いたつた。これは私のような年寄りでも可



2009年厳冬期若江国境尾根南部縦走

能なささやかな一つのパイオニア・ワークではなかるうかと考え、長期継続する心構えで取り組む決心をした。

二万五千分の一の地図を眺めて、実働三〜四日で歩ける楽しいそうな尾根筋を探してみて、自分なりの縦走ラインを作ってみる。入山や下山の時の交通の便を調べておくのも大切なことだ。一年近く前に翌冬の縦走計画を企画し、まず一緒に歩いてくれる仲間を捜しメンバーを決めておくのが何よりも重要なことだ。低山とはいえ、一人でラッセルしながらの縦走は極めて困難。湿雪のラッセルには三人は欲しい。

最初の三年は若越国境や湖北のヤブ山への縦走をぶつつけ本番で出かけたが、支尾根が多く複雑な尾根筋を間違つて降りかけ、随分と時間を無駄にする失敗を何度も経験した。四年目からは無雪期に偵察に出かけ、迷いやすそうな箇所には赤布テープをとりつけることにした。偵察を実施し始めてからは、ほとんど大きな道迷いもなく積雪期の縦走が非常にスムーズにやれるようになった。無雪期に偵察山行として歩いておくと、無雪期と積雪期の稜線の変化を知ること出来たいへん面白い。このひどいブッシュの箇所が雪で埋まってくれるかしらと想像し、期待通りに楽

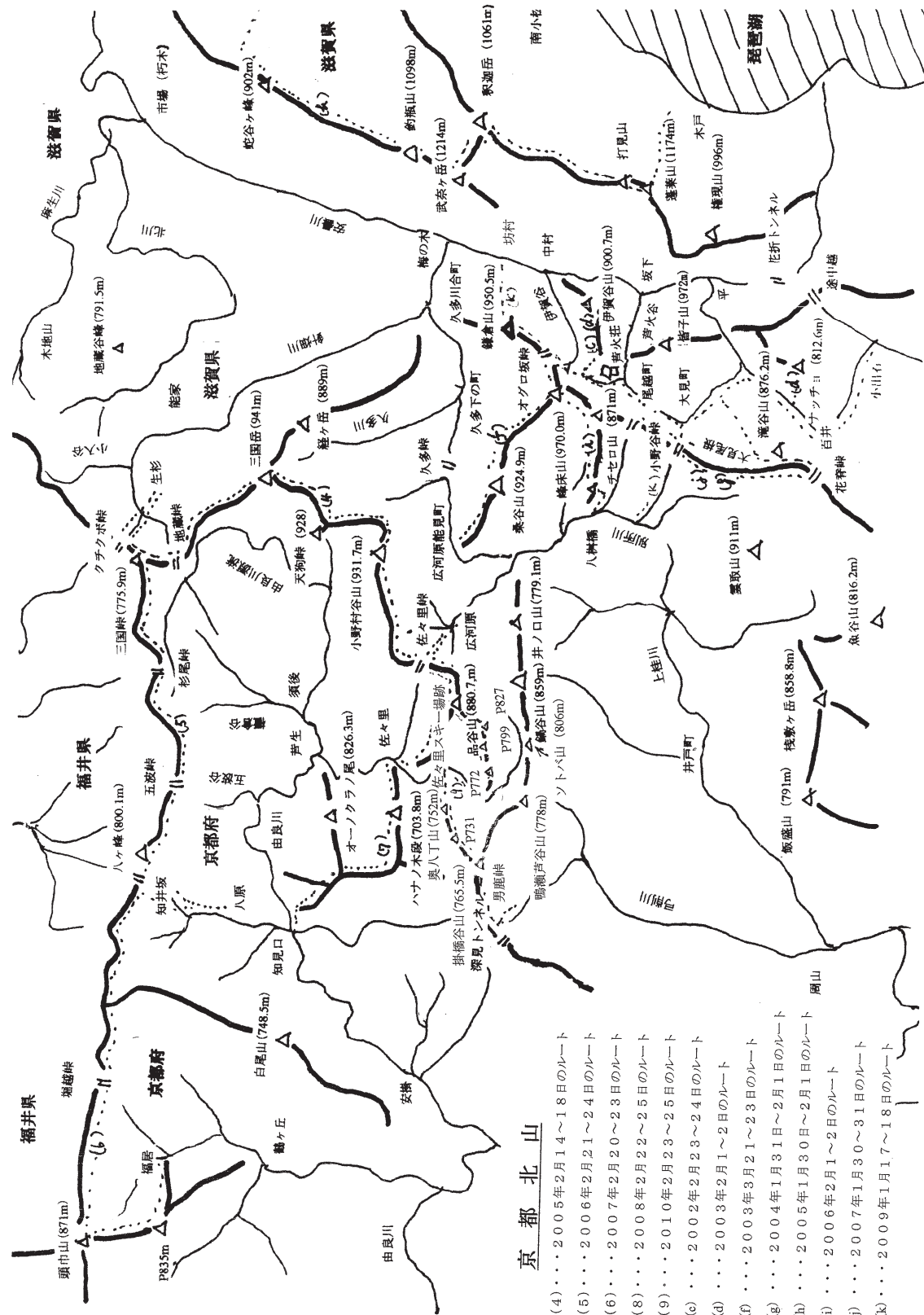
に歩けた時などは実に嬉しい。冬の北山は湿雪とのたたかいだ。重い湿った雪のラッセルは、本当にしんどい。標高が低いので、厳冬期でも雨が降ることが多い。冬山用テントより、フライのついた夏山テントの方が有効だ。しかし、チャックで閉閉するテントは、雨や湿雪で濡れたチャックが凍結して開閉出来なくなる欠点がある。

日本海からの季節風をまともに受ける若丹国境尾根や若越国境尾根は、早朝はしばしば湿雪がカリカリに凍結する。六本爪のアイゼンは必携で、ワカンとの併用で尾根筋を歩く時がしばしばだ。

一〇〇〇mに満たない低山といえども、吹雪や雨で動けない日が当然ある。実働四日のコースなら予備日は二日はみておく必要がある。六日分の食糧を担ぐと荷物は二〇kg近くになり、重荷をかついでのラッセルは楽ではない。年寄りの私たちには体力維持が、最も大きな課題であった。各自、荷物をかついでの自主トレーニングで体調管理を行ってきた。

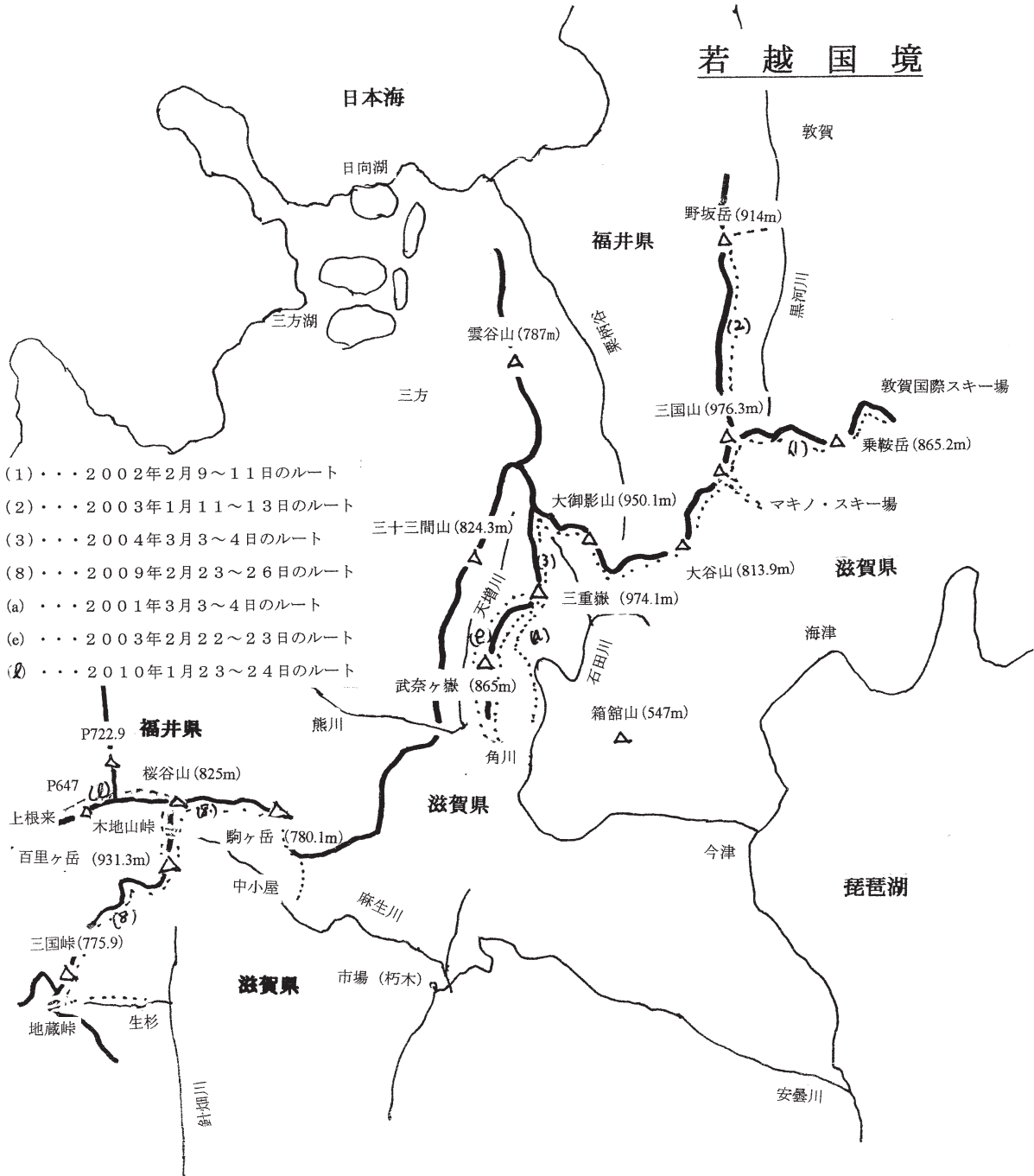
京都北山や滋賀・福井県境の山々は、標高は低いが地形が非常に複雑だ。この数年相棒の堀内さんがGPSを使い出し、偵察時の赤布テープと共に非常に有効な武器となった。若越国境や京都北山の積雪期低山藪山ワカン縦走は、二〇〇二年から始めたが、幸いこれまで山行は、一度の敗退もなくすべて計画通り縦走することが出来た。

鹿やカモシカに遭遇することは度々だが、縦走中に他の登山者に出会ったことは殆どない。



京都北山地図

若越国境



- (1)・・・2002年2月9～11日のルート
- (2)・・・2003年1月11～13日のルート
- (3)・・・2004年3月3～4日のルート
- (8)・・・2009年2月23～26日のルート
- (a)・・・2001年3月3～4日のルート
- (e)・・・2003年2月22～23日のルート
- (㊀)・・・2010年1月23～24日のルート

若越国境概念図



新雪のラッセル (2008年2月北山最深部縦走)

(二) 二〇〇二年二月九日～二一日:

マキノ・スキー場―栗柄峠―赤坂山―三国岳―乗鞍岳―敦賀国際スキー場。

*メンバー: (L) 阪本公一、平井一正、八太幸行、佐藤典子、西岡圭子、能田直子
(二) 二〇〇三年一月二日～二三日:

若越国境尾根縦走 (野坂岳―三国岳―赤坂山―栗柄峠―マキノ・スキー場)。

*メンバー: (L) 阪本公一、平井一正、堀内潭、牛田一成、朝倉英子、佐藤典子
(三) 二〇〇四年三月五日～九日:

湖北中央部ヤブ山縦走 (マキノ・スキー場―栗柄峠―寒風山―大谷山―大御影山―三重嶽―武奈ヶ嶽―角川)。

*メンバー: (L) 阪本公一、宮川清明、堀

内潭

(四) 二〇〇五年二月一四日～一八日:

由良川分水嶺縦走 (生杉―若走路谷―クチクボ峠―三国峠―地藏峠―三国岳―小野村割岳―佐々里峠―広河原)。

*メンバー: (L) 阪本公一、堀内潭、山田睦郎
(五) 二〇〇六年二月二日～二四日:

第一回若丹国境尾根縦走 (生杉―若走路谷―クチクボ峠―三国峠―八ヶ峰―八原)。

*メンバー: (L) 阪本公一、堀内潭、山田睦郎、八木昭二
(六) 二〇〇七年二月二〇日～二三日:

第二回若丹国境尾根縦走 (八原―八ヶ峰―頭巾山―P835m―福居)。

*メンバー: (L) 阪本公一、堀内潭、岡部光彦
(七) 二〇〇八年二月二日～二五日:

北山最深部ヤブ山ワカン縦走 (広河原―佐々里峠―品谷山 (880.7m)―佐々里―ハナノ木段山 (703.8m)―P792m―P662m―知見口)。

*メンバー: (L) 阪本公一、堀内潭、岡部光彦
(八) 二〇〇九年二月二三日～二六日:

若江国境尾根南部縦走 (生杉―地藏峠―三国峠―P709―おこめ峠―根来坂峠―百里ヶ岳 (931.3m)―木地山峠―桜谷山 (824.5m)―与助谷山 (753.8m)―若狭駒ヶ岳 (780.1m)―P744―足立口)。

*メンバー: (L) 阪本公一、堀内潭、岡部光彦

(九) 二〇一〇年二月三日～二五日:

京都北山中央部縦走 (広河原―佐々里峠―品谷山 (880.7m)―P872―P772―八丁出合橋―佐々里スキー場跡―奥八丁山 (752m)―P731―鴨瀬谷山 (765.5m)―男鹿山―深見トンネル南口)。

*メンバー: (L) 阪本公一、堀内潭、岡部光彦

積雪期の北山は非常に迷いやすく、或る意味では標高の高い北アルプスの積雪期縦走より難しい。低山の積雪期の樹林の山旅の勘をやしない、的確なる判断力と体力をつけるために、二三日の積雪期の登山を反復して行い、実働四日、予備二日の縦走をこなせる訓練山行につとめた。

(a) 二〇〇一年三月三日～四日:

石田川ダム―P812m 東尾根―P812m―P674m―二重嶽 (974.1m)―P812m―石田川ダム。

*メンバー: (L) 阪本公一、永田龍、河村皆子、朝倉英子、佐藤典子
(b) 二〇〇二年三月一〇日～二一日:

大見村―尾越―芦火荘―八丁平―峰床山コル―大見村 (雪深く峰床山に登れず)。

*メンバー: (L) 阪本公一、石崎重治
(c) 二〇〇二年二月二三日～二四日:

大見村―尾越―芦火荘―伊賀谷山 (900.7m)―芦火荘―大見村。

*メンバー: (L) 阪本公一、堀内潭、八太幸行

(d) 二〇〇三年二月一日～二日:

百井―ナツチョ (天ヶ森 812.6m)―大見

村―芦火荘―伊賀谷山 (900.7m) ―大見。

*メンバー… (L) 阪本公一、宮川清明、宮川ふみ江、八太幸行、佐藤典子、西岡圭子

(e) 二〇〇三年二月二日～三日：

角川村―湖北武奈ヶ嶽 (865m) ―三重嶽 (974.1m) ―湖北武奈ヶ嶽―角川村。

*メンバー… (L) 阪本公一、堀内潭、八太幸行、中西博己、朝倉英子、佐藤典子、前川真貴子

(f) 二〇〇三年三月二日～三日：

花脊峠―大見尾根―大見村―尾越―芦火荘―八丁平―峰床山 (970m) ―P838m―P796m―P799m―桑谷山 (924.9m) ―P804m―能見口。

*メンバー… (L) 阪本公一、堀内潭

(g) 二〇〇四年一月二日～二月一日：

大見村―小野谷峠―P877m―小野谷峠―大見村―尾越―芦火荘―八丁平―オグロ坂―峰床山 (970m) ―芦火荘―大見村。

*メンバー… (L) 阪本公一、堀内潭、石崎重治、吉田利明、山崎洋介

(h) 二〇〇五年一月二〇日～二月一日：

近江高島駅―朽木スキー場―蛇谷ヶ峰 (901.7m) ―釣瓶岳 (1098m) ―武奈ヶ岳 (1214m) ―八雲ヶ原―金糞峠―比良岳 (1051m) ―蓬萊山 (1174.3m)。

*メンバー… (L) 阪本公一、堀内潭、山田睦郎

(i) 二〇〇六年二月一日～二日：

八桝橋―P715.6m―P682m―チセロ山 (871m) ―芦火荘―大見村―大見尾根―花脊峠。

*メンバー… (L) 阪本公一、宮川清明、井上潤、堀内潭、山田睦郎、岡部光彦、鈴木正典、河村方孝

(j) 二〇〇七年一月二〇日～二一日：

花脊峠―大見尾根―大見村―尾越―芦火荘―大見村―小野谷峠―八桝橋。

*メンバー… (L) 阪本公一、嶋岡章、高野昭吾、亀井清太郎、堀内潭、岡部光彦、田代妙子

(k) 二〇〇九年一月一七日～一八日：

坊村―鎌倉山 (950.5m) ―芦火荘―小野谷峠―小野谷口。

*メンバー… (L) 阪本公一、堀内潭、佐藤典子、鈴木正典、鈴木享子、光島雅美、田中貴

(l) 二〇一〇年一月二三日～二四日：

上根来―P647―桜谷山 (825m) ―木地山峠―百里ヶ岳―桜谷山―P647―上根来)。

*メンバー… (L) 阪本公一、堀内潭、佐藤典子、永田龍

今西錦司さんの「自然と山」という随筆の中にある「地元のヤブヤマ」という章に、次のような名文がある。

「地元のヤブ山くらはいは、なんの雑作もなく歩けるのでなくては、おかしいはずだが、まだなかなかそうはゆかない。精通してない証拠であろう。それにしても、ヒマラヤの山でさえこのごろは、たいてい一度で成功しているのに、一度で成功できるとはかぎらない山登りが、こんな標高の低い地元の山にあるなんて、なんとというおかしな、また考えよう

によつては、なんと恵まれたことだろう。これではいくつになっても、山登りから足が洗えそうにない。」

今西さんの文章に触発されて、低山ヤブ山の積雪期ラッセル縦走を始めたが、「よう、あんな低い藪山へ四日も五日もかけてラッセルに行きますねー」と笑われることが多い。しかし、地図を見ながら自分でルートを企画して、誰も行こうともしない、誰のトレースもない、積雪期の静かな忘れられた樹林のヤブ山をワカンで縦走する楽しさは、私にとつてはヒマラヤやアンドースの山旅にも劣らない醍醐味である。北山周辺の積雪期縦走は、年寄りの私にでも出来るささやかなバイオニア・ワークではなからうかと、地図を眺めながら夢を暖めている。今西さんの言葉ではないが、このおもしろさは足腰が立たなくなるまで止められそうにない。こんな地味で、泥臭く、しんどい山旅につきあつてくれる山仲間、心より感謝したい。

シーハイル

安田隆彦

シーハイル

年をとつたらスキーはしない方がいいと決めていた。先年、平井ポコ兄が妙高外輪で経験した事柄からの教訓です。しかし三年間日本を留守している間に、関東AACCK兼笹ヶ峰会メンバーの始めた「雲南懇話会」のおか

げですっかり事情が変わってしまった。雲南懇が一般の方の参加を含めていつも一〇〇名を超える講演会として、二〇〇五年から継続的に行われていることに先ずは驚嘆した。この会は、中国雲南省・チベット自治区そしてヒマラヤを中心に東西南北広大な辺境地域を対象に、多分野に渡る、ハイレベルの情報を発信し続けている。最近のAACK活動の中ではきわめて秀逸な、存在感のある社会貢献と思う。

その会の帰り道、泉谷イッセキから崑崙山脈の未踏峰成功の報を聞き感動を受ける。登りやすい山もあるとのこと、若しかして自分も可能かもと、秘かに体の準備をしていたら、幸運にも二〇〇九年安仁屋隊への参加を許された。その事前山行に山スキーも一回含まれていたの、やむなくスキー道具一式を新調した。今シーズンになってグレンデスキーに出かけたところ、びっくりすることはあり。先ずはスキー場が新幹線のおかげで東京から極めて近くなっていた。ガウラ湯沢など、寒波の来た日を見計らって朝一番で川崎市の家を出れば、八時半には新雪のグレンデに立てる。スキー場が空いているのでどこもリフトを待たずに、好きなだけ滑れる。ゴンドラも多く、長距離そして高度を一気に上げてくれる。宿は二食付で平均七千円、自宅で作っても四千円以上はするご馳走が腹一杯食べられ、しかも設備はきれいで快適。圧巻は越後湯沢にある「かぐらスキー場」の林間コース。高速リフト脇のひと山を林間スキー用に開放されているので、新雪が降ったときなど

は、一日中新しいシユプールを描き続けられる。学生時代に妙高外輪で楽しんだ、雪まみれになってのスキーがそのまま再現できる。スキーなどすっかり忘れているリタイヤー組にお勧めです。

人工温泉

ニセコにスキーをしに行つた時利用した宿の浴室には、光明石温泉と表示されていた。どんな温泉か聞いたところ、光明石という石にお湯を通しただけとのこと。眉唾温泉と思つたが、意外と気分が良かったので毎日三回は入っていた。帰ってからネットで調べてみると全国千数百箇所のホテル、療養所で使われるもの。家庭用のセットもあるとのこと。日頃老体を使いすぎているので、温泉と信ずれば多少の効果はあるだろうと思ひ、騙されたつもりで一二万六千円をはたいた。使つてみると匂いもツルツル感もなく、ほんの少し水色が濃くなるだけ。しかし二ヶ月も使つていたら、思いもかけない効果が現れてきた。膝が悪くていつも病人面している妻の顔色が、いつの間にか若々しい頃のツヤツヤ顔になつてきた。私の足に出来始めていた栗大のあざのようなものがいつの間にか消えかかっている。頭髮は白っぽい灰色だったのが、黒っぽい灰色に変わってきた。一番のびっくりは性力がすっかり元気になり、数年前の強さに逆戻りしたこと。どうやら体全体が活性化されたようだ。食事、運動、睡眠等の生活全般がなんら変化のない中で、唯一変わったのは

温泉使用だけ、光明石の効果であることに間違いはない。今まで温泉療法などと聞くと、現代医療の恩恵から遠い、爺さん婆さんの話と思つていたのだが、すっかり認識を改めさせられました。気がつけば自分自身がこんなことを信じる爺さんになつていたので笑いを禁じえません。日頃退化しつつある老体を嘆いておられる方には、投資効率抜群の商品と思います。ただし、まやかし物の多い品物ですの、もし試してみようとされる方は、本家 (<http://www.kounseiki.co.jp/top.html>) のものをご使用ください。

山岳保険

三年前、山を再開したとき山岳保険はAACKの斡旋しているものに迷わず入った。保険が適用されるには、一週間前に山行計画書を出し、下山したらすぐその旨報告しなければならぬ。計画書を事前に出さないと付保されない上に、出すと昔の水曜会ルームと同じ雰囲気です。計画に対する指導を受ける。過去の遭難例を引き合いに出しながら、常時フル装備的登山準備を勧められる。見方によっては大変有難い存在だが、毎日が日曜日の身にはいささか過分に感じた。天気予報を見ながら、「明日から好天が続くそうだから歩きに行か」と誘い合つて山に入り、少しでも雲行きが怪しくなつたらさつさと下山する。山頂を極めよう、計画どおり遂行しようなどとは全く考えない老人らしい登山をしたい。自己責任登山ということをも十分認識し、それに見合うような十二分の準備をするのは当然な

がら、もう少し気楽な保険はないものかと探していたら日本山岳協会の山岳共済会保険の個人加入があった (<http://www.jma-sangaku.org/kyosai/profile/>)。このサイトの、よくあるご質問の1の1に、団体だけでなく個人としても加入を勧めている。その情報公開欄を開いてみると、現在共済会の会員数約四万八千人のうち約六割が個人会員です。個人加入でも保険の内容はAACKが斡旋する

『AACK学生会員制度の創設』の提案

京都大学山岳部長

松林公蔵

京都大学学士山岳会(AACK)は従来、「学士」と名称しているように、京都大学山岳部出身者または他大学卒業者で法人の目的に賛同した者が入会資格をもつ組織でした。しかし近年、現役山岳部員の減少といった登山の時代的な背景もあり、またAACKの活動自体も一九九六年の梅里雪山再挑戦以降は実質的に停滞傾向です。AACKの正規会員は高齢化の一途をたどっており、AACKのもつ人脈、ノウハウは継承する価値があると思います。事実、KUAC山行の登山の実技指導は、AACK会員や会員ではない若手OBのかたがたによって担われております。

また、AACKは従来、未踏の登山を通じて、会員相互の親睦と一般登山界に対する社

ものと同じで、費用も同じ、僅かながら振り込み手数料が無料な分だけ割安になる。登山計画書の事前提出、下山後の報告、共に不要です。誠に簡便です。入山前に麓の登山届け箱に計画書を放り込むだけで十分。万一それを忘れても保険契約期間中は家を出てから帰るまでいつでも付保されているという実には有難いもの。老後登山を気楽に楽しみたい方にはお勧めです。

会貢献を担ってまいりましたが、近年の若手会員の入会がとだえて以降、若手養成・人材育成については、消極的とならざるをえないのが実情でした。

このような状況に鑑み、このたびAACKに、卒業までは入会金と会費を軽費とする「学生会員制度」を創設し、有志の学生に入会いただき、AACKとKUACの相互の交流を深めてゆく方向性を提案したいと思えます。

新制度の要点と効果について、以下、私見をのべます。

制度の要点

- (一) AACKに、卒業まで入会金・会費を軽費とする「学生会員」制度を新設する。
- (二) 学生会員のわくは、KUACが時に山行をともしにしている府立大AC、その他関連の大学の学生ACメンバーでもよい。
- (三) 入会金、会費は学生時代は軽費とする

が、入会の手続きは、本人の意思表示

とともに会員二名の推薦など、所用の手続きをふむこととする。

- (四) 学生会員が卒業の節は、正規の会費を伴うAACKの通常会員としてあつかう。

効果

- (一) 若い学生にとって、伝統あるAACK会員との人的交流が密になる。
- (二) 若者の少ないAACKにとって、時代を担う若者との交流が広がり、将来の正規会員リクルートのきつかけともなる。
- (三) 現役という新しいムーブメントがはいることにより、死蔵しているAACKの経験、人脈、活動などのより活性化が期待できる。
- (四) 現役・AACKを含めた新たな研究会やプランが発生すると思われ、それを契機に、両者の活性化が期待できる。
- (五) AACKに、海外登山遠征補助にくわえて、若干の「教育予算」を措置し、現役学生の教育に貢献することのできる。

現今、山岳部員の減少とともに、大学を超えた現役山岳部同士の融合という現象がおこっておりますが、AACKとKUACの人的融合は、もっとやりやすいと思います。同じ登山をめざすが登山文化の異なる「若・若融合」が大学山岳部コンソーシアムであるのに対して、登山文化が共通している同じ京大のOBと現役をつなぐ「老・若融合」が制度的に

も実現することは、AACKとKUAC相互の交流・発展に寄与すると考えております。

現役学生諸君よりの寄稿

AACK学生会員として入会するにあたって

三回生 田中 貴

最初に、唐突ではありますが、そもそも私がなぜ京都大学山岳部に入部しようと思ったのかということを述べようと思います。受験を終え入学が決まって、今までやってきたことは全く別の何か新しいものをやってみたいという意志がありました。また、私の精神の根底には昔読んだ小田実氏の「何でも見てやろう」が流れています。Conformity（画一）してしまった世界は面白味がなく、どこに行っても同じものがあり、同じことができ飽和した世界、そこから脱却するためにいろいろなるものを自分の目で見て、なんでも挑戦していきたいと思うのです。そこで、今まで登山などというものはやったことがなかったし、冬山にも登ってみたいと思って山岳部に入部することに決めました。

そして、せっかく山岳部に入ったのだから、誰も登ったことがない処女峰を登りたいという漠然とした考えが入部当初からありました。この衝動は誰かに刷り込まれたものではなく、自分の内なるところから湧きあがってきたものであります。理由は分かりませんが、恥ずかしながら、未踏の地というものに憧れ

を抱くのです。しかし、未踏峰を登りたいという気持ちが強くなる一方で、相反して世の中には未踏の地などはほとんど残されていないということに気づかされていきます。国内はもちろんのこと、海外を見ても目ぼしい処女峰は先人によって登られてしまっています。後に生まれてきたことを悔やんでも仕方ありません。

いくら未踏だといつても、未踏峰の中でも私たちの欲求を満たす資格があると言えるような山というものはあるのではないかと思うのであります。それは山の大きさや地形的条件といった山容による威厳があるものではないでしょうか。それは、たとえ既登であろうと未踏であろうと、威厳があり魅力的であるがゆえに、登りたいと思う対象になりえるのだと思います（そうでなかったら登山という娯楽なんか続きません）。だからといって、万人が登ったルートの記録を調べ、そしてガイドブックに載っているところだけを登る登山様式はまさに私が嫌うConformityにつながるのです。誰かが行った山の記録を読み、その記述通りに登山を無難に完遂させるだけの山行であります。（必ずしもそうではないが）そこにはもう魅力はないのです。つまり、僕の中で今現在の国内山行はまさにアンビバレントな形で行われているのです。このアンビバレンスを生み出さない、条件の揃った魅力のある山はなかなか見つかりません。だからこそ、あらためて魅力ある未踏峰を探し出し、登りたいと思うのです。

今年の夏、京都大学山岳部はネパールに海

外登山に行こうと計画を立てています。対象は未踏峰ではありません。年間に何人もの人が登る既登峰であります。これを読まれた方は、この計画こそConformityの塊なのではないかと思われるでしょう。しかし、私の中では今回の海外登山は将来未踏峰へ挑む際の前段階としてとらえています。また、ただ単に国内では経験しえない大きな山に登りたいという考えもあるのです。

そして、このたびAACK学生会員制度が導入され、最初の学生会員として入会することとなりました。今回の海外登山においては、未踏峰ではありませんが、ここからいろいろと学べることも多いと思っております。そしてなによりも次に繋げる下地としたいのです。若輩者ではありますが、今後とも何卒ご協力いただけますようよろしくお願い申し上げます。

海外の山へ向けて

三回生 藤竿和彦

僕が一回生の夏、幸島先生にネパールのラシタン谷に連れて行っていただくという機会に恵まれました。この時の経験は僕にとって貴重なものです。その時のトレッキングは氷河まで、山の頂上に行くというわけではありませんでした。谷の下からヒマラヤの稜線や尾根、壁をただ見上げていただけでした。どの山も大きく、谷は険しく、なんといっても標高が高いことが僕を驚かせました。登山

経験のなかつた僕には、初めての北アルプスでさえ大きく、険しく感じていたのですが、ランタン谷ではそれよりもはるかにスケールが大きいので、感動の毎日でした。雲が足の下を流れ、信じられない高さの壁が存在する風景は初めて見るものでした。それに、氷河上に大きな起伏があり、上部と下部とは状態が違って、水が勢いよく流れている様子などは想像もしていませんでした。初めてこんなにもダイナミックな世界が広がっていることを知ったのです。氷河生態系についても興味深く、まさに氷河は不思議な世界でした。このトレッキングで僕はランタン谷の自然の大きさに圧倒され、魅了されました。

その後、今までの二年間に日本の山を経験しました。確かに、日本の山も刺激的で、活動を続けることに行ってみたいと思う山や谷が増えていきました。しかしながら、僕の訪れた場所には、ランタン谷で見たような壮大な風景は当然ながらありませんでした。大きいと言っても、ヒマラヤの方が比べものにならないほど大きいのです。日本の山だけでは満足できず、だんだんと海外の大きな山々に登ってみたい、高所に登ってみたいという気持ちが強くなっていきました。OBの方や周囲の人が話す海外登山の話も僕を刺激しました。そうした方々の話を聞いて、日本の山にはない魅力が海外の山にはあるのだと感じるようになっていきました。そして、ヒマラヤやアルプス、アンデスなど海外の雄大な山にしたいに引きつけられるようになりまし

た。そうした山々の巨大な氷河の上を歩いて、

日本にない大きな壁に取りついてみたい、そう考えるようになっていきました。

田中から海外の山を登ろうという提案が出た時に、すぐに参加することを決めました。当然ながら僕は海外登山の経験がありませんし、現役の部員にも経験者は一人もいません。僕は登山を始めてからまだ二年と、知識も技術もまだまだ未熟で不安を感じる部分も多くありました。しかし、海外へ行ってみたくて、先ず六〇〇〇m級のトレッキングピークであるニレカピークを登ろうという結論に達しました。僕たちの登るニレカという山は今までに先輩方の取り組んできた山々に比べると、丘のような山かも知れません。しかし、今回の登山で海外登山について、高所登山について多くのことを学べるのではないかと期待しています。ここからステップアップしていき、大きな魅力に溢れた海外の山へ挑戦していきたくて考えています。

ネパール遠征を思う

二回生 荻原宏章

このたび、京都大学山岳部のネパール遠征に参加する山岳部二回生の荻原宏章というものです。つきましては、その参加するに当たったの趣意を述べさせて頂きたいと思えます。

この文書を書くに当たって、まずはじめに言わなければならぬことは、私は今度の登山隊の中で最下級生であり、体力、技術の両

面においてもつとも劣る隊員だということですから。つまり、自分自身、先輩方のレベルについて行くのは大変であり、さらに隊の足を引っ張ってしまうことにもなりかねない、というリスクをふまえた上でも参加したいと思つた、ということなのです。しかし、こんなことを言っておきながら無責任ですが、正直私が参加する理由は、「ヒマラヤ登山」というものに対するぼんやりとした憧れ、好奇心といったもの以上のものはありません。しかし、その憧れは決して小さなものではありません。

山に登るといふ行為に人間が惹きつけられる理由に、圧倒的な自然の中での開放感、困難な課題にチャレンジする充実感といったものが挙げられるとするならば、そもそも私が京大山岳部に入ったのも、その困難に取り組むという姿勢自体に憧れたからです。確かに山岳部に入る前から、何度かは山に入ったことがあり、その爽快感を味わい、それも山岳部に入ったことの一因です。しかし、それよりもやはり、その一見不可能にすら見えるルートに取り組み、突破していく行為自体に惹かれるところが大きいのです。

山岳部に入る直接のきっかけになったのは、京大に入る前の年に、気分転換に穂高に行つたことでした。そのときに見た北鎌や大キレットの圧倒的な雄姿は今まで自分が見知つていた世界とは全く別のものでした。その衝撃、そしてそこを突破していく人間達の姿に憧れたのです。そうした困難に挑んでいく場所、アクションの代名詞が、私にとって

は「ヒマラヤ」だったのです。

山岳部に入って山を本格的に始める前は、海外登山、ましてや「ヒマラヤ」などという単語は、現実味のない遙か彼方の、憧憬のなかにある言葉でした。そんな言葉は自分とは別の次元にいる、超人のような人々にしか縁のないものでしかなかったのです。それが今回、山岳部の先輩方によって目の前に、現実のものとして立ち現れたのです。私はまさに千載一遇だと思い、参加しました。

確かに、今回チャレンジするニレカはそれほど難しいわけではありません。ましてや、AACKがかつて登ってきた巨大な山々、初登頂という偉業にくらべれば大したチャレンジでは無いのかもしれませんが。

しかし、その最初の一步としては大いにふさわしいものだと思うのです。我々KUUC

梅里雪山の留学生が

同志社大に合格

小林尚礼

梅里雪山の遺体搜索拠点である明永（ミンヨン）村の若者が二年前に来日しましたが、この春、同志社大学・社会学部に合格しました。応援してくださった方にお礼申し上げますとともに、この間の経緯を報告いたします。

合格したのは、明永村で昨年まで村長を務めていたチャシ氏（扎史、四八歳）の娘、ペマツオモ（白瑪次木、二三歳）です。チャシ

現役にとつて、AACKはその実績もさることながら、なによりそれを支えたパイオニア精神において大きな目標であり、潜在的な支柱となつていて大きいと思うのです。我々のすぐそばにAACKという組織がその伝統とともに今なお在るということはとても大きく大きな意味があるのです。このたび、AACKに学生会員として加入するにあたって、そして初の海外遠征をするにあたって、そのパイオニア精神の一端でも糧にしたいと考えております。

この遠征が自分にとつても、ルームにとつても得るもの大きいものとなることを確信しております。

AACK会員の皆さんには、よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

元村長は、一九九八年から始まった搜索活動に全面的に協力して下さり、現在も残る一人の搜索に尽力しています。搜索のため村を訪問するたびに私は彼の家に泊めてもらい、一九九九年に一三歳の長女ペマツオモに初めて会いました。彼女は成績優秀で、中甸（チョンディエン、現シャングリラ）の藏文中学を卒業後、青海師範大学に進学して、英語を学んでゆきました。あるとき、彼女から海外への留学希望を聞いたのですが私にはなす術がなく、数年後に明永村を訪ねた有志の方が彼女の支援をして下さることにになり、日本への二年間の留学が決まったのです。

二〇〇八年三月に来日した彼女は、チベット通の作家・渡辺一枝さんの紹介で、東京タワーの隣りにある日本語学校に入学しました。いきなり東京の真ん中で暮らすことになった彼女は、食事や都会の人づき合いなど様々な試練を受けましたが、天性の柔軟性と多くの方の応援でのりきり、大学進学を希望するまでになりました。

しかし、日本の大学入試はそれほど甘くありませんでした。留学二年目の中だるみや私の留守も重なり、昨春秋に東京の大学をいくつか受けたのですが、結果は滑り止めの私立大に受かっただけ。これでは学費支援の呼びかけも難しいということで、AACK会員を中心とした周囲の人々が彼女の受験指導に乗りだし、わずか一ヶ月で付焼刃の受験生に仕上げて、関西の三つの入試に送りだしました。その頃は彼女の帰国方法を、真剣に考え始めていました。ですが、結果は大阪府立大と三重大は不合格で、最も難しいはずの同志社



故兒玉隊員のお母様に振袖を着せて頂いたペマツオモ

大に合格！ 耳を疑うとともに、当初考えていなかった京都の大学に進学するという、不思議な「縁」を感じました。

四月末の現在、彼女は御所近くの女子寮に住み、期待と不安を胸に京都での大学生活を始めています。東京から引越した直後は、京都弁が聞きとれないとか授業の選び方がわからないなどと口にしていましたが、京都でもまた多くの方に支えられているようで、最近週末も忙しいとのこと。寮生活でいいスタートができたことは、毎日新聞（四月二二日夕刊、関西）に掲載された写真の通りです。そんな彼女の姿を見ると、何かに

図書紹介

「トウガラシ讃歌」

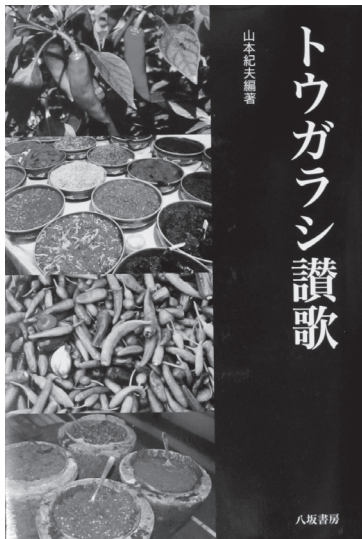
山本紀夫編著 八坂書房
B6判 二九四ページ
二四〇〇円十税

前田 司

本書はトウガラシに関心をもつ研究者や写真家、シエフが分担執筆したトウガラシの文化誌である。山岳書ではないが取り上げられている地域にはなじみのアンデスやインド、ネパール、ブータン、チベットなど山岳地も多い。チベット、なかでもトウガラシ好きの雲南省のチベット人については、AACCK会員で自然写真家の小林尚礼氏が執筆してい

守られているのではないかと思うことがあります。それは、梅里雪山なのかもしれない。悲劇の山ですが、そこから生まれる明るいものがあってもいいと思います。

雲南省に住むチベット人が日本の大学に入るの、初めてのことでしょう。彼女にはこれからも多くの試練があると思いますが、四年間の大学生活を最後まで送ってほしいと思います。そして、私たちと梅里雪山の人々との架け橋になってもらいたいと思います。このような経緯ですので、京都での四年間、ペマツオモへのご支援・ご指導を、どうぞよろしくお願いいたします。



る。氏は「梅里雪山―十七人の友を探して」の著書で知られるように、梅里雪山で逝った隊員の捜索のため氷河の末端の明永村で一年にわたり現地の人と暮らしを共にした。その後、雲南省縦断旅行の経験をあわせて彼の地の人々のトウガラシを主とした食生活をレシピとともに活写している。

編著者の山本紀夫氏もAACCK会員。平成一八年日本山岳会の秩父宮賞を受賞した気鋭の植物学、民族学者である。一九六八年探検部のアンデス学術調査隊に初陣し、そこで栽培植物の起源を調査する対象としてトウガラシと出会う。植物学者として研究を進めていたが、その後国立民族学博物館に奉職したことで民族学の知見が加わりスケールの大きい「トウガラシの起源と栽培化」の博士論文に昇華させた。こうして氏の体に染み着いたトウガラシではあるが、主食のかげに隠れて目立たない存在である。そこでトウガラシが世界の食生活に果たしている役割を明らかにするために氏の幅広い人脈を活かして企画されたのが本書。

その構成は地域別になっており、トウガラシの伝播の流れにしたがって、原産地の中南米に始まり、そこからヨーロッパを経て、アフリカ、アジア、そして極東の日本へと地球を東回りする。しかしどこから読んでもホッと一冊である。

平成二二(二〇一〇)年度事業計画

I 山岳および登山に関する学術調査および研究

一 (定款第二章(目的および事業)第五条第一項)

一 ヒマラヤ、カラコラム、チベット、崑崙地域等における登山ならびに学術探検の文

献の収集ならびに研究

(一) ヒマラヤ等上記の地域の登山ならびに地質学、気象学、水河学、動・植物学、人類学、医学などの学術探検に関する文献資料を収集し、それぞれの分野に関して研究を行う。

(二) 国際的な登山探検文献等資料の収集と整理

過去数十年にわたる本会の海外遠征および学術調査によって蓄積された学術資料ならびに国内外における学術資料を収集・整備充実し、その公開をはかることよって国際的な登山活動の文化発展に寄与することを目的としたセンターを昭和四八(一九七三)年に設立し、さらに平成一二(二〇〇〇)年に収集資料を京都大学総合博物館ならびに京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に寄贈した。引き続きその資料充実と収集資料の整理に協力する。

(三) 雲南・チベット地域の総合的研究を目的に平成一六(二〇〇四)年に設立された雲南懇話会(代表…会員・安仁屋政武)の運営に協力する。

(四) 第三〇回日本登山医学シンポジウムの運営に協力する。

二 高所登山に関する調査研究

本会が主催したチベット高原学術登山隊ならびに過去数回にわたる海外遠征によって得た資料を基に、引き続き高所登山に関する調査研究を行う。

(一) 高所医学に関する調査研究

(二) 高所気象学、水河学に関する調査研究
(三) 高所用装備特に合成繊維・軽金属に関する調査研究
(四) 高所用食糧に関する調査研究
(五) 高所山岳遭難の防止に関する調査研究

II 一般社会に対する健全な登山の奨励と指導

(定款第二章(目的および事業) 第五条第二項)

一 登山講習会の開催と講師の派遣

健全な登山を奨励するため下記により登山講習会を行う。

(一) 無雪期登山講習会(京都大学山岳部と共催)

平成二二(二〇一〇)年度の無雪期に、新潟県妙高市京都大学笹ヶ峰ヒュッテにて、一般登山者に対して、本会会員を指導者として登山技術・遭難防止・自然愛護を目的とした講習会を開催する。

(二) 積雪期登山講習会(京都大学山岳部と共催)

平成二二(二〇一〇)年度の積雪期に、新潟県妙高市京都大学笹ヶ峰ヒュッテにおいて、一般登山者に対し、本会会員を指導者として積雪期登山に必要な次の項目について講習会を行う。

(イ) 登山に必要なスキー技術

(ロ) 雪中露営および幕営

(ハ) 氷雪技術

(三) 他団体主催講習会への講師の派遣

文部科学省スポーツ・青少年局が主催する登山技術講習会、日本山岳会が主催する海外

登山研究会ならびに国際山岳連盟の高所医学研究会に会員を講師として派遣する。

III 国内外における登山および探検の企画および協力

(定款第二章(目的および事業) 第五条第三項)

一 国内山岳会の海外登山隊への資料提供と協力

国内の山岳会が主催するカラコラム、ネパール・ヒマラヤ、ブータン・ヒマラヤおよびチベット高原地域などへの登山隊および学術調査隊に資料を提供し、十分な協力を行う。

二 中国、インド、ネパール、パキスタン、ブータン国内の登山および学術調査

各国の登山協会、山岳会、関係諸団体と連絡をとり、調査を行う。

三 遠征基金の運用および管理

昭和五〇(一九七五)年度に、本会に設立された京都大学学士山岳会遠征基金を遠征基金運用規程に基づき運用・管理する。

四 海外登山・探検助成制度の運用

平成一七(二〇〇五)年度に設立した海外登山・探検助成制度を運用し、本会会員が主催する海外登山・探検に対して助成金を交付する。

IV 山岳登山に関する図書および機関誌などの刊行

(定款第二章(目的および事業) 第五条第四項)

一 事業報告ならびに事業計画

A4判一二ページの小冊子を作成し、本会の事業報告ならびに事業計画、新入会員などの紹介を掲載する。毎年一回発行し、配布先は本会会員である。

二 AAC K時報の編集と発行
AAC K時報一四号の編集を行う。

三 ヒマラヤ学誌
ヒマラヤ研究会ならびに総合地球環境学研究所(高所プロジェクト)が発行する「ヒマラヤ学誌」一一号の編集・発行に協力し、同誌を本会会員に配布する。

四 AAC K Newsletter
AAC K Newsletterを年四回編集・出版し、本会会員に配布して会員相互の情報交換を図る。

五 ウェブサイトの運営
本会の公式ウェブサイト(www.aack.or.jp)を運営し、本会の歴史と活動、会員の動向や山行計画と報告などについて広く社会に情報公開し、会員および会員外の情報交換の場とする。

V 目的を同じくする国内および国外の団体との連絡および情報の交換
(定款第二章(目的および事業) 第五条第五項)

一 パキスタンの山岳会との交流
日本・パキスタン合同のサルトロ・カンリ峰遠征隊の成功を契機として続けられているパキスタンの山岳会との交流をさらに深め、もって友好関係にある両国登山界の発展に寄与し、ひいては日本・パキスタン両国の親善

に貢献する。

二 中国の登山協会との交流

昭和五五(一九八〇)年、中国登山協会代表の本会訪問を契機として始まり、カンペンチン峰、ナムナニ峰合同登山隊以降続けられてきた中国の登山協会との協力をさらに深め、もって友好関係にある両国登山界の発展に寄与し、ひいては日本・中国両国の親善に貢献する。

三 日本ブータン友好協会との交流

昭和五六(一九八一)年に設立された日本ブータン友好協会との交流を通じ、両国の友好を深め、両国登山界の発展に寄与し、ひいては日本・ブータン両国の親善に貢献する。

四 ネパール山岳関係者との交流

本会設立当時から続けられているネパール山岳関係者との交流を深め、もって友好関係にある両国山岳界の発展に寄与し、ひいては日本・ネパール両国の親善に貢献する。

五 そのほかの山岳会との交流

ポーランド山岳会、ヒマラヤンクラブ、ドイツ山岳会、オーストリア山岳会、英国山岳会、アメリカ山岳会等との交流を深め、これら各国登山関係者との親善に貢献する。

平井一正氏に「瑞宝中授賞」

平成二二年度春の叙勲で本会会員の平井一正氏が、永年の教育研究に功労があったとして「瑞宝中授賞」を受賞されました。これは以前の勲三等にあたりますが、勲章に等級を

つけるのはおかしいということになり上記の勲章となりました。

五月一日、国立劇場にて文部科学省より伝達式、そのあと皇居にて天皇の拝謁式に臨まれました。同伴出来るのは配偶者のみで娘や内縁もだめだとのこと。永年苦勞をともした奥様へ最高のはなむけということです。この点平井氏は奥様の早逝を悔恨されておりました。

AAC K会員では近藤良夫、堀了平、左右田健次、松浦祥次郎、今川好則、藤平正夫各氏が叙勲されておられます。山口克氏は死後贈呈されました。もちろん今西、桑原、梅棹氏は別格です。以上は編集子の知るところの方のみお名前をあげましたが、もっとほかにも叙勲されたかたはおられると思います。遺漏や間違いがあればお知らせください。

事務局報告

【理事会決議録】

日時 平成二二年五月一六日(日)

午後一時から午後二時五〇分

場所 京都市左京区吉田河原町

京大会館二一一号室

出席理事 上田豊、山岸久雄、松林公蔵、

前田司、永田龍、吹田啓一郎、竹田晋也

以上七名

委任状によるもの 前田栄三、横山宏太郎、

松沢哲郎、牛田一成、中川潔、幸島司郎、

人見五郎、高尾文雄、小林尚礼 以上九名

出席監事 福寫義宏、伊藤宏範 以上二名
議事の経過および結果

会長上田豊が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成二一年度事業報告について
理事竹田晋也により平成二一年年度事業報告が説明され、逐次審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成二一年度収支決算について
理事吹田啓一郎により平成二一年年度収支決算が説明され、逐次審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案 新公益法人制度への対応について
議長より新公益法人への対応案が説明され、逐次審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第四号議案 新入会員について
議長より左記六名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

根岸 哲生、田中 貴、岡部 岳人、
藤竿 和彦、荻原 宏章、森本 悠介
議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名の署名捺印すること」として閉会を宣言した。

報告事項

一、松林理事より、DVDブック「カラコ

ム／花嫁の峰チョゴリザーフィード科学のバイオニアたち」が京都大学学術出版会から刊行されたことについて報告があり、監修者梅棹忠夫、刊行委員長平井一正をはじめとする多数の会員の協力に関して謝辞が述べられた。 以上

【総会決議録】

日時 平成二二年五月一六日（日）
午後三時から午後五時

場所 京都市左京区吉田河原町
京大会館二一〇号室

正会員の総数 二四六名
出席者数 一三五名

（うち委任状出席 一〇六名）

議事の経過および結果

上記の通り定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事（会長）上田豊が定款の規定により議長となり、下記議案の審議に入った。

第一号議案 平成二一年度事業報告および収支決算について
担当の者より平成二一年年度事業報告および収支決算について報告があり、逐次審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案 平成二一年度事業計画および収支予算について
議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で承認可決した。

第三号議案 新公益法人制度への対応について
議長より新公益法人への対応案が説明され、逐次審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第四号議案 理事の退任について
田中昌二郎理事より理事の退任願いが出され、満場一致でこれを承認可決した。

以上をもって議案すべての審議を終了したので午後五時議長は閉会を申し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人が議事録末尾に署名押印する。

報告事項

一、新入会員について
理事会において承認を得た六名の本会入会者が紹介された。

二、梅里雪山峰登山隊について
小林尚礼理事の現地訪問概要が報告された。昨年度の現地搜索活動では、明永村の協力を得て少量の遺品が回収された。

三、会員平井一正より、DVDブック「カラコム／花嫁の峰チョゴリザーフィード科学のバイオニアたち」（京都大学学術出版会）の刊行が報告され、関係者への謝意が表明された。 以上

【事務局からのお知らせ】
一般社団法人への移行
新公益法人改革への対応として「一般社団法人」への移行と新定款案が総会で承認されました。当初は京都府への申請を想定しておりましたが、AACKは複数の都道府県で事業をおこなうため内閣府申請が適当であると

いう指導を受けましたので、内閣府への申請手続きを進める予定です。

会費徴収運用の変更

これまで卒業後五〇年を経過した会員の会費を不徴収としてまいりましたが、今年度から定款にしながら年會費の請求書を送付させていただきますので、ご協力をよろしくお願いたします。また学部在学生の会員からは入会金五〇〇円、年会費五〇〇円を徴収することとなりました。

事務局担当の交代

平成二二年四月より事務局担当が吹田啓一郎理事から竹田晋也に、会計担当が竹田晋也から吹田理事に交代いたしました。

会員異動

ル剤になるか乞うご期待である。

総会の議決でもうひとつ。前項の報告の通り入会五〇年を経た会員の会費免除が廃止された。会員二四六名（平成二一年度末）のうち現在会費免除の会員は六八名、それがこの免除制度を維持するなら今後の五年間でさらに五一名増えて総計一九九名となり、このまま正会員の入会が少なくなると、会を構成する半分近い会員が会費免除という異常な状態となる。会計からのこの現状報告に、免除が対象になる中老の多数の会員より「免除不要」という元気な声が上がリ、満場一致で「会費免除」の制度は廃止された。会員の年齢層で一番多数を占める方々の元気なご意見は頼もしい。

総会で京都大学に寄贈された「国際登山探検文献センター図書」の利用方法について質問がでたが、本誌45号に竹田晋也氏が詳しく記述しておられるので参照されたし。

次号発行予定 八月下旬。原稿締切 七月十日（お盆休みがありますので、締切日が早くなっております）。（前田 司）

編集後記

松林公藏副会長の提案のAACK学生会員制度が今年度の総会で可決され、やれやれいくらかは若返った気がする。総会のあとの懇親会には新学生会員のヒマラヤトレッキングの計画も紹介され、あちこちに親子のような話の輪ができた。さてこれがわが会のカンフ

発行日 二〇一〇年五月末日

発行者 京都大学学芸会 会長 上田 豊

発行所 〒六〇六八五二

京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究所 竹田晋也 気付

編集人 前田 司

製作 京都市北区小山西花池町一八

（株）土倉事務所